

鳴滝参籠 (二)

西 木 忠 一

四

「けふは十五日、齋ひなどしてあり」と、自邸を飛び出した六月四日からのち、確實なる日付はここにはじめて記された。

意地を見せて鳴滝にて精進の日々を送る作者はそれとして、彼女に同行を強いられた道綱はその若きがゆえに堪え難き試練であったろう。「松の葉ばかりに思ひなりにたる身の同じさまにて、食はせ」られては、「えも食ひやらね」も当然のこと。そんな道綱を見るたびに涙を流した母であったことは、彼女の「不浄なる」時にすでに記されていた。

今日は六齋日ゆえに母は息子を京に下し、「魚など物せよ」というのであった。その帰途に道綱が兼家の文を持ち帰った。鳴滝参籠を執行して最初の兼家からの文である。

文面からは怒りが消えており、いささか余裕まで覗かれる。彼女

がその口ほどに即刻出家などを決行するようにも思えぬ安堵からであろう。また、当時の物詣でが一日・三日・七日・十四日・二十一日という形でなされたゆえに、十二日目当たる十五日では彼女が下山するとも思えないことにもよるであろう。日記は続けて侍女たちの文通を記している。彼女をめぐる侍女たちなどの、京と鳴滝との心の交流が窺える条である。作者と某女との

かけてだに思ひやはせし山深くいりあひの鐘にねを
添へむとは(作者)

いふよりも聞くぞ悲しきしまの世にふるさとの
人やなになり(某女)

の贈答、元侍女と侍女との

身を捨てて憂きをも知らぬ旅だにも山路に深く思ひ
こそすれ(元侍女)

思ひ出づる時ぞ悲しき奥山の木の下露のいとどしげ
きに(侍女)

の贈答が記されており、前者の贈答で作者がかかる境涯にならうとは思ひもしなかったと今の悲痛なる思いを詠ずれば、某女は同情の涙を禁じ得ぬ心情を詠み送って来た。また、後者の贈答で元侍女が作者の鳴滝ごもりに理解を示せば、侍女は堪え得ぬ思いを詠み上げた。この人々はいずれも作者に対して同情的立場に立ったのである。今回の参籠になんら非難めいた口吻が見えず、彼女の立場に対する積極的とはいえぬまでも理解者であったことは否めないであろう。

ところで、十五日に道綱が持ち帰った兼家の文には「もし、たまさかに出づべき日あらば、告げよ。迎へはせむ」とあった。「迎へせむ」でなく係助詞「は」が添えられているところに、兼家の姿勢が窺えるであろう。作者が下山しようというならば迎えることはしてやろう。しかし、下山しないものに強いて迎えるという意志のない兼家の立場が明確になる。そこで彼女は「まかでむことは、いつとも思ふ給へわかれねば聞えさせむ方なく」などと返事をしたためたのであった。いや、かくしたためざるを得ない状態に陥っていたというのが実状だと思われる。ところが兼家からの次の文には「一夜の心ばへよりは心弱げに見ゆるは、行ひ弱りにけるかと思ふにも、あはれになむ」などと記してある。「あはれになむ」と記しながらも兼家は、「落ち着き払い、すでに作者の内心を読みとっているらしく、下山は時間の問題と、多寡をくくっている」^(注)のであった。兼

家は作者に下山の日を問わなかったらしい。思う存分参籠を続けてみよともとれる態度を見せる兼家には、作者下山の時期がそう遠くないことを観取していたのであった。兼家の手の中でのみ作者は思う存分の行為を許されているのだ。

翌日「なましぞくだつ人」の来訪があった。鳴滝参籠決行の作者に不審を抱いていたようだったが、作者の、この次第の説明によって納得したらしい。「日ぐらし語らひて、夕暮の程」に下山した。泊は伴っていない。

その翌日、同じ「なましぞくだつ人」(近親者)から文が届けられた。近親者が

(A)世の中の世の中ならば夏草の繁き山べも尋ねざらまし

(B)世の中は思ひのほかになるたきの深き山路を誰知らせけむ

と詠んで作者の境涯の変転を嘆いて来れば、作者も

(A')物思ひの深さ比べに来て見れば夏の繁りも物ならなくに

(B')身一つのかくなるたきを尋ねればさらにかへらぬ水もすみけり

と、(A)に対して(A')を・(B)に対して(B')をそれぞれ対応させてわが身の不運を悲しむ返歌をしたためたのであった。

この「なましぞくだつ人」はなかなかの貴婦人だったと思われる。作者のもとを訪れた時、「破籠など、あまた」準備し、作者と終日語りあって下山した時、作者は「心深く、物思ひ知る人」と見ている。そして、翌日は「旅に久しくありぬべきさまの物ども、あまた」を

文に添えていた。裕福に暮す高位の夫人であったことがこれで証され、かつ作者がそんな女性にふさわしい応対をしていたことが二首の返歌にも表れている。特に(B)の「思ひのほかになるとき」に対する、(B')「身一つのかくなるとき」は近親者と同様の技巧・修辭によつて返歌をしているのが、作者の近親者に対する礼儀正しさを如実に示しているといえよう。

「なましぞくだつ人」に関しては、二日間にはわたる見舞のための来訪と翌日の文の遣り取りが日記に記されているが、作者が記さんとする中心をなすのは、後者の文の遣り取りにこそ認められる。

次に作者は貞観殿尚侍登子と修行者との関わりを記している。この条はいずれもその内容にいささか余裕と風流とがある。

前者の登子との文の往還においては、両者の文面は日記に記されずに「上文」のみを記すに終わっている。作者が「西山より」としるせば登子は「東の大里より」と返して来る。「西」と「東」・「山」と「里」を対比させていて遊びの心がある。このことに関して作者は「いとをかしと思ひけむも、いかなる心にて、さるにかりけむ」と「けむ」を頻用して、「やおおぼつかなさを伴った回想ぶりからは、この時より相当時日を隔てた後の執筆であることが明らかに窺えるだろう」との推測が許されることになろう。

後者の修行者による落し文は、日記の文面によれば事実ということになるのであるが、「外山だにかりけるをと白雲の深き心は知るも知らぬも」の歌を落し文にするという行為にはあまりの風流心があるゆえに、却つて作者の作意がほの見えて来るようである。落

し文ゆえに返歌のできる筈もないものの、歌人道綱母なればおのずから独詠歌を詠じたであろうし、何らかの感想も脳裏をかすめた筈であろう。それらが日記に記されていないところが疑問として残つて来るのであろう。この修行者による落し文の条は、事実を記すのみで他はすべて読者の判断に任せる立場をとっている。かかる作者の立場は鳴滝参籠全体の記述において、他に例を見ないものである。

五

ある日の昼つ方、兵衛佐(道隆)の来訪があった。「人のあまたあるけはひ」でなかなか大勢の臣下を引き連れていた。これまでしばらくは文の遣り取りであったが、ここで京の人が彼女のもとに現れた。これでいよいよ彼女の鳴滝ごもりも終末を迎えた感がある。

兵衛佐はまず大夫(道綱)を呼び出し、作者との仲介の位置に彼を据える。道隆は道綱の二歳年長にて十九歳の前途洋々たる好青年である。今回は父兼家の意を受けての来訪であった。「木陰に立ち休らふ」道隆のさまは京をしのばせ、作者は「いとをかしかめり」と記すに至っている。

道隆は兼家からの伝言「かく参らば、よく聞えあはせよ」を彼女に告げた。そこで彼女は「などか。人のさのたまはずとも、今にもなむ」と答える。「人」は兼家を指していて、殿の言葉がなくてもその内に下山するつもりだと語ったのであった。では、「同じくは、けふ出でさせ給へ」と道隆がつけ寄る。この折り畳むがごとき道隆の

迫り方が、却って彼女の持ち前を誘発する結果となる。作者の「けしきもな」い状態に、とりつくしまもなくなった道隆は、仕方なく下山せざるを得ないのであった。こうしたなりゆきになったとはいえ、道隆の姿を見送る彼女の心にある思いは「又は問ふべき人もなし」という、全くの孤独の境地に陥ってしまうのであった。

この結果は兼家も十分予測していたと思われる。ただ、彼女の心に徐々に厚味を持つて広がって来る孤独感こそが、とりわけ兼家の重視していたものであったのだ。

いったい、兼家はどうして十九歳の道隆を使者にたてたのであろうか。道綱に対する見舞というのでもあれば、ともに青年同士ということで納得できぬわけでもない。それを強いて作者下山のための説得の使者にたてるには、それ相当の理由がなければならぬであろう。私はここに兼家としては道隆誇示の気配のあったことを考える。好青年道隆の、従五位下の道隆の姿を作者の眼前に出現させて、彼女の「母」の心を揺さぶろうとする計画があった筈である。彼女に「問ふべき人もなし」と思うまでの孤立感を痛感させて、参籠決行によって愛息道綱の受ける、将来に対する打撃を暗示しようとするのが兼家の目的であったわけである。

兼家の心理作戦は見事に的を射たようだ。彼女は心のうちに「人もとぶらひ尽きぬれば、又は問ふべき人もなし」と思ひ至り、周辺の者達には口外することはなかったものの、身を責める孤独感にうちひしがれることになるのであった。

こうして、状況はいよいよ彼女に下山せざるを得ない展開になっ

て行くのであった。

次の来訪者は「我が頼む人」(父)である。作者は六月十日すぎの頃に父倫寧のことを「あしともよしともあらむを吞むまじき人」と記していて、彼女は父に全幅の信頼を寄せていたことが判明しよう。そういう父が「ただ今のぼりけるままに来て、天下のこと語ら」つた後に彼女に下山をすすめた。兼家の命を受けて急抛丹後から上京したものと思われる。

父は「この君、いとくちをしうなり給ひにけり」と、道綱のことをまず最初に語り出した。先日の道隆も、「この大夫の、まれ／＼京に物しては、日かげかたぶけば、山寺へと急ぐを、見給ふるに、いとなむゆゆしき心ちし侍る」と彼女に語っていた。片意地を張つて二十日間にも及ぶ鳴滝参籠を決行して来た彼女にとって、一子道綱は彼女が子として愛するがゆえに、かつ道綱を頼りとするがゆえに、道綱は彼女にとってアキレス腱的存在であった。だから、道綱の身に話題の鋒先が向くと、さすがの彼女も喉元を締めつけられるような思いを味わうことになる。「では、下山をしては……」と迫られると、そんな息苦しさの中でも彼女の本性が頭をもたげて来たのであった。

だが、今回はそこまでの気力も失せてしまっているようだ。いや、「我が頼む人」が「疑ひもなくいはるゝ」ゆえに、決定的な下山時期の到来を彼女は身をもって感じていたのである。

鳴滝参籠前半に見えた「心安し」なる語はすっかり影をひそめ、

(1)いとあはれと悲しくながむる程に……(某女の返事を見て)

(2)(道綱を)出だし立てたれば、例の、時しもあれ、雨いたく降り、雷いといたく鳴るを、胸ふたがりて嘆く(作者の文を届けるために下山した道綱の身を案じて)

(3)身には、いひ尽くすべくもあらず悲しうあはれなり(「なましぞくだつ人」から長い山ごもり用の品を送られて)

(4)かくのみ出でわづらひつつ、人もとぶらひ尽きぬれば、又は問ふべき人もなしとぞ、心のうちにおぼゆる(道隆下山後)

などと記していて、この期において彼女がいかに困惑し、孤独感にさいなまれ、真実のところどれほど都に心が向いていたかが理解できるであろう。

彼女は父の来訪以前に「京のこれかれのもとより」文のあったことを記し、いずれも下山の時期をはずすなどの忠告の文面から、「こたみはよにしぶらすべくも物せじ」と、いささか覚悟をきめざるを得ぬ状況下にあることを明らかにした。彼女はいま至極狼狽の様子である。だが、案外彼女の本心は下山したいという思いが徐々にその比重を増していたであろうというのが、いつわらぬところであつたらう。

「我が頼む人」の来訪と説得は、彼女の心から争う氣力を抜き去って行つた。

釣する海人の泛子ばかり思ひ乱るゝに、のゝしりて、者来ぬ。

と、いよいよ兼家が彼女を引きずり下ろしに來た。上村悦子博士の

「『釣する海人の泛子ばかり』と語調も直線的で強く、水中であつちへ行つたり、こちへ來たり一瞬の停止もなく動揺しつづける泛子こそ彼女の心情そのままの象徴ではないか。この引歌は古歌の単なる借りものでなく、作者自身の心情表現になりきつてゐる」との評が見えるごとく、なかなか見事な古歌を生かした表現である。

泛子のようにわが意志の決定しえない時、そんな不安定な状態をぶち破つて兼家一行が彼女の前に現れたのだ。全くの實力行使そのものであつて、彼女に一寸の隙をも与えない。

兼家が道綱に「いかに、大夫、かくてのみあるをば、いかゞ思ふ」と問えば、道綱は「いと苦しい侍れど、いかがは」とうつむく。そこで兼家が「出で給ひぬべくは、車寄せさせよ」といい終らぬうちに、道綱が「立ち走りて、散りかひたる物ども、たゞ取りて、つゝみ、袋に入るべきは入れて、車どもに皆入れさせ、引きたる軟障なども放ち、立てたる物ども、みしみしととり払ふ」のであつたと日記は記している。この場における道綱の働きは、なかなか見どころがある。父兼家が「いひも果てぬ」に、次々と下山の支度を手際よく終えて行くのは、どうも変である。

母の氣持を無視して矢庭にこの挙に出るには、彼にもこれ以上の参籠修行は限度を越えるものだとの読みがあつたゆえの、突発的行爲と考へるのがより一般的であらう。だが、果してそうなのであろうか。私はここに兼家と道綱による示し合わせがすでになされてゐたと読むのである。あまりの道綱の手際よさに、母が「あきれて、我が人かにてあ」る状態に陥つたが、それはすでに予定された路線

だったわけである。

二十一日間にわたる鳴滝参籠において、諸人物の会話中になされた道綱の呼称をみると、

きんち・そこ・大夫・君

となっていて、父兼家は「きんち」を、母は「そこ」を使用、他は老女と倫寧が「君」を、そして道隆は「大夫」と官名で呼んだ。それぞれの立場にふさわしい道綱の呼称であったが、ただ一例のみ兼家が「大夫」と呼んでいて、それがこの下山の条なのである。つまり、父兼家がわが子を官名で呼ぶところであって、ここに兼家の態度が見えるであろう。「いかに、大夫、かくてのみあるをば、いかゞ思ふ」と、一個の社会人としての判断を道綱に迫ったのであるといえる。子供として扱わずに、いかにも形式ぶった右近衛大将と大夫との会話となっていて、ここに兼家の「おどけ」がある。余裕十分なる兼家は、かくして彼女を下山させることに成功したのであった。

なかなか動こうとしない彼女を道綱に託した兼家は、自分だけ一足先に下山しようとする。そこで道綱は「泣きぬばかり」に懇願したので、彼女は「我にもあらね」心地で鳴滝を去ることになったのであった。

大門を出たあたりから兼家も彼女と同車して「亥の時」に帰郷した。この日「申の時ばかり」に兼家は姿を見せてから、ほぼ六時間を経ていたのである。日記によれば不本意ながら下山させられたごくであるが、実のところは無事下山できて一息ついていたのは作

者自身であった筈である。

かくして二十一日間に及ぶ、『蜻蛉日記』全篇のクライマックスをなす鳴滝参籠が幕を閉じたのであった。

六

山路、なでふことなけれど、あはれに、古もろともにのみ時々は物せしものを、また、病むことありしに、三四日も、このごろの程ぞかし、宮仕へも絶え、籠りてもろともにありしは、など、思ふに、はるかなる道すがら涙もこぼれ行く。

と書き出された鳴滝参籠も、二十一日後には

はる／＼といたる程に、亥の時になりたり。京には、昼、さるよしいひたりつる人々心づかひし、塵かいはらひ、かどもあけたりければ、我にもあらずながら、おりぬ。

で幕を閉じた。その昔兼家とともに鳴滝へ来たことや、病気のため三四日も宿泊した折のことなどを思い出すにつけても、今回の参籠が兼家と「もろとも」でないために、遠い道程を「あはれ」を感じ「涙をこぼし」つつ登る悲痛な心情に比べ、下山の時は皮肉にも兼家と「もろとも」でありながら、「我にもあらず」の心理状態であったと日記は記している。

この下山当日は

(1) ……散りかひたる物ども、たゞ取りて、つつみ・袋に入るべきは入れて、車どもに皆入れさせ、引きたる軟障なども放ち、立てたる物ども、みしみしととり払ふに、心ちは、あきれて、我か人かにてあれば、……。

(2) 「疾く〜」と、手を取りて、泣きぬばかりにいへば、いふかひもなきに出づる心ちぞ、さらに我にもあらぬ。

(3) 大門引き出づれば、乗り加はりて、道すがら、うちも笑ひぬべきことどもを、ふきにあれど、夢路か物ぞいはれぬ。

(4) はる〜といたる程に、亥の時になりたり。……かどもあけたりければ、我にもあらずながら、おりぬ。

と以上四箇所に作者の茫然自失のさまを記している。道綱との示し合わせによる兼家の強行手段はすでに彼女の覚悟していたことはいうものの、(1)(2)に見える道綱の処理と(3)(4)に見える兼家の誇らしげな顔つきに対して、彼女は、「我か人かにてあれ」「さらに我にもあらぬ」「夢路か物ぞいはれぬ」「我にもあらず」と記しているのがあった。まさに「我か人か」の心理状態で、自分を見失うなかで帰郷したということになっている。

この一日は、だから彼女は涙をあまり記していない。ただ一度「……天下の散楽言をいひのゝしらるめれど、夢に物もいはれず、涙のみ浮けれど、念じ返してあるに、車寄せて、いと久しくなりぬ」と記されているのみである。ただし、この記述も直前に「夢に物もいはれず」と記されていて、何の発言も出来ない彼女はただ泣くのみであったのであり、もしここで彼女に自己を主張する気力があつ

たとすれば、涙は浮かばなかったかも知れない。

こうした下山当日の茫然自失の心理状態は、六月四日に「山路、なでふことなけれど、あはれに」「はるかなる道すがら涙もこぼれ行く」「花も一時といふことを、返しおぼえつゝ、いと悲し」と記されていたのとよき対照をなしている。兼家の手から逃げるがごとく鳴滝参籠を決行しながら、その一方でそんな自分の現在を泣いてみせるという出発時の彼女の悲嘆と、泣くことすら忘却したかに見える下山当日の彼女の姿とは、作品構成上において見事な対照をなしているのを読者は読み取るであろう。こうした様相は他に多々指摘することができる。鳴滝参籠の条は、(A)六月四日から六月十四日ごろまでと、(B)「けふは十五日」と歴史的現在の「けふ」で書き出されて下山するまでの、前後に二分されていて、(A)(B)両者を比較する時、おのずから浮かびあがってくるものである。

前半(A)において鳴滝の自然を適宜描写していた作者が、後半(B)に入ってから自然描写をほぼ捨て去ってしまったのもその一例である。時は晩夏ゆえに自然の推移は二十一日間にゆるやかに秋にむかっていた筈である。たとえ山間部であっても、いささかながらも彼女の目を奪う自然の変化が生起していたものと推測される。ところが、作者はあっさり捨て切ったに等しい有様である。ここで、後半(B)から自然描写とおぼしき箇所を列举すると、

(1) けふは十五日、……京へ出だし立てて、思ひながむる程に、空、暗がり、松風、音高くて、雷、ごを〜と鳴る。今はまた降り来

べからむ物を、道にて雨もや降らむ、雷もや鳴りまさらむと思ふに、いとゆゝしう悲しくて、仏に申しつればにやあらむ、晴れて、程もなく帰りたり。

(2) 「……あなかしこ」など書きて、出だし立てたれば、例の、時しもあれ、雨いたく降り、少し静まりて、暗くなる程にぞ帰りたる。

の二箇所のみであり、いずれも雷鳴に関わっている。「晴れて、程もなく帰りたり」「少し静まりて、暗くなる程にぞ帰りたる」と、京へ行かせた道綱の姿を見て安堵するところにこの条の中心があったのである。

前半(A)で見た自然描写は

(1) 山めぐりて懐のやうなるに、木立いと繁くおもしろけれど、闇の程なれば、たゞ今暗がりてぞある。

(2) めぐりて山なれば、昼も人や見むの疑ひなし。簾巻き上げてなどあるに、この時過ぎたる鶯の、鳴きくゝて、木の立ち枯れに、「ひとくく」とのみ、いちはやくいふにぞ、簾おろしつべくおぼゆる。そも現し心もなきなるべし。

(3) 木陰、いとあはれなり。山陰の暗がりたる所を見れば、螢は、驚くまで照らすめり。里にて、昔、物思ひ薄かりし時、「二声と聞くとはなしに」と腹立たしかりしほとゝぎすも、うち解けて鳴く。くひなは、そこと思ふまで、たゞく。いとみじげさまさる物思ひの住み処なり。

(4) かくてあるは、いと心安かりけるを、たゞ、涙もろなるこそ、いと苦しかりけれ。夕暮の入相の声、ひぐらしの音、めぐりの小寺の、小さき鐘ども、我もくゝと打ちたゞき鳴らし、……。

と見えて、読者にしみじみとした情感を抱かせた自然描写が、後半ではそれほど彼女の心情とのからみが複雑ではなく、ただ道綱の身を案ずる契機でしかありえなかつたのである。自然の情趣の中に身を沈めて、おのが人生を思いみるというがごときものではなく、愛息道綱を思うとともに、いまは道綱以外に頼りとする人を持たぬ状況を描いていたわけである。また、いまさらながら自分の将来に対する不安が身を責めていて、なるべく体裁よく下山できることのみが心が働いていて、自然を眺めて涙するほどの心理的な余裕もない状態だったのである。

次に、鳴滝参籠全体の構成を眺めてみると、前半(A)は、

- ① 兼家の来訪
- ② 作者から兼家への文
- ③ 叔母の来訪
- ④ 妹の来訪
- ⑤ 兼者の使者の来訪
- ⑥ 父の文

となっていて、③④⑤を来訪として一括すると、

来訪↓文↓来訪↓文

と交互に記されていることになろう。ところが、後半(B)は、

- ① 作者と某女との文通
 - ② 元侍女と侍女との文通
 - ③ 兼家と作者との文通
 - ④ 近親者の来訪と、作者との文通
 - ⑤ 貞観殿尚侍登子と作者との文通
 - ⑥ 修行者の落し文
 - ⑦ 道隆の来訪
 - ⑧ 父の来訪
 - ⑨ 兼家の来訪
- となっていて、④が来訪と文通の両者ではあるが、その中心は後者にこそあったことは既に述べておいたところである。つまり、①②③④⑤⑥が文(通)でまとなり、⑦⑧⑨が来訪でまとなっている。どうやら作者は、前半(A)と同形式の単なる繰り返しを回避したらしい。なお、前半(A)に見えた「心安し」が後半(B)で姿を消すのも、その一例に加えることができよう。
- 私はこうした点において、作者の鳴滝参籠を執筆するに際して、相当の作意を読み取るのである。作者は『蜻蛉日記』全篇の中心をなす鳴滝参籠を記すにあたり、相当に心を砕いたのであった。彼女の心情とは別に、十分の心の準備をした上で鳴滝参籠の条を記したのである。

本文引用は角川文庫『蜻蛉日記』(柿本奨校注) によった。

(注5) 柿本奨氏『蜻蛉日記全注釈』上巻(四五四頁)

(注6) 注5参照(四六三頁)

(注7) 『蜻蛉日記』(中) 全訳注(二五三頁)

(付) 「鳴滝参籠」(大阪樟蔭女子大学論集 第25号) に続くものである。